

■みつなかオペラ「マノン・レスコー」



遠近法効果を狙った舞台装置が歌手たちを美しく彩った＝仲野 達也撮影

みつなかホール（兵庫県川西市）が開館20周年、「みつなかオペラ」が25回目を迎えた。近年はドニゼッティ、ペツチーニを各3作連続で採り上げ、場当たりの名曲路線とは異なる公共劇場の個性を確立。今回の「マノン・レスコー」はプッチーニ・シリーズの第1弾（2日）。

郊外都市の市民オペラに端を発しながら、いまや全国からファンが駆けつける隠れたオペラの聖地。他都市がめざすべき自主事業の鑑だ。シユボックス型室内楽ホールでのオペラ上演は、音響的にも視覚的にも贅沢の極み。ステージの間口がオペラハウスのように狭いため、自然に舞台上に集中できる。歌手も声を張り上げる必要はない。表現

愛し合う男女の相互救済

の機微が明瞭に聴き取れる。マノンは美貌ゆえに男を破滅させる「運命の女」。だが、その魔性を悪女と呼ぶことはできない。自らも墮落を避けられぬ宿命を負う。だから真に愛し合う男女の相互救済が究極のテーマとなる。終幕の、不毛の荒野での責めの苦しみを、いかに「愛と死」の心理劇として彫琢するか。

マノン役の並河寿美とデ・グリュー役の藤田卓也の歌唱は期待以上に充実し、舞台の実質を創った。井原広樹の演出は、しかし複雑な情念の形象化に課題を残した。遠近法効果を狙ってか、舞台の内側に装飾額縁を常設。切り絵のような美しさが際立つ反面、世紀末芸術に横溢するエロスが締め出されてしまった。

レスコー役の迎撃は会心のパフォーマンスで魅了し、片桐直樹のジェロンテは申し分のない貫禄を示した。エドモンド役の谷村悟史は資質に恵まれたテノール。牧村邦彦指揮のザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団は、室内オペラ用に編曲した版ながら、的確に勘所を押さえて好演した。

（音楽評論家 藤野 一夫）

関西音楽新聞  
2016年11月号

第25回みつなかオペラ  
プッチーニ「マノン・レスコー」

色彩的な表現を含む  
牧村邦彦の見事な指揮

オペラ評

みつなかオペラでは、プッチーニ・シリーズが開始され第1作の「マノン・レスコー」を観た。継続して演出を担当する井原広樹の舞台は充実しており、ことに3幕フランス、ルアーブルの港からアメリカへ囚人として送り出される娼婦たちと兵士を前後左右と立体的に動かして鉄格子の内側と広い海を俯瞰させるアイデアには感心した。

一方マノンとデ・グリューが会おう1幕のアミアンの宿屋の場では、2人の恋の情熱を押し進める群衆に、はじけるような青春の躍動感があり



© 仲野達也

感じられないのが惜しい。アントニオ・マストロマッティの深い青と赤を基調とする装置が落ち着きをもたらし、2幕の18世紀のパリや、狭い舞台上でニューオリンズの荒野の広がり再現した4幕が見事。オーセンティブ

ツクな衣装は村上まさあき。木澤佐江子（マノン・レスコー）は、力強さと流麗さを求められる難しいこの役をよく歌った。畑奨のレスコーはフレージングに優れ、松森治（ジェロンテ）とみつなかオペラ合唱団（合唱指揮・岩城拓也）も堅実に歌った。プッチーニ作品の中でも本作ではテノールの2役に繊細なフレージングと半音階的な高度な表現が求められており、十全な表現は極めて難しい。

が、松本薫平（デ・グリュー）と大淵基丘（エドモンド）はその責任をかなり果たしていた。ザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団は豊富な舞台経験を生かした演奏を聞かせた。「マノン・レスコー」は、本来400席強の当ホールに入りきらない上演規模となるが、管弦楽のリダクションを倉橋日出夫が担当し、縮小した編成で成果を上げた。

前年までのベッリーニ作品とは全く異なるスタイルの本作で牧村邦彦の指揮は見事な成果を収めた。歌い手と呼吸をあわせて、息の長い旋律を歌わせ、色彩的な表現と情熱、繊細さと力強さをあわせもっている。このみつなかオペラはわれわれの財産である。来年は珍しい「妖精ウィッリ」等の上演が予定され、期待は大きい。（10月1日、みつなかホール）（夏山知

音楽の友  
2016年11月号

第25回みつなかオペラ  
《マノン・レスコー》

地域オペラとしてスタートした川西市のみつなかオペラだが、近年の活動をみると、そのレヴェルを抜け出して、オペラの本流に歩を進めようとしている。今回からスタートする「プッチーニ・シリーズ」は、まさにそのスローガンで、プッチーニの処女作であり、出世作でもあった、この作品とガッブリ四つに組んだ。牧村邦彦指揮、演出井原広樹、合唱指揮岩城拓也、並河寿美（マノン・レスコー）、藤田卓也（デ・グリュー）、片桐直樹（ジェロンテ）他。

初演のころは、いわゆる「プッチーニ節」の甘いメロディや、泣かせの要素に乏しいなどの批判もなくはなかったが、こうして真正面からみると、ロマン派の末期といわれるプッチーニが、新しいオペラの創造に全力を投じていたかがよくわかる。

この意欲を見事に把握して力演したのがマノンの並河と、デ・グリューの藤田であろう。有名アリアとして、単独に演奏されることの多いこの演目だが、単にお涙頂戴の歌唱ではなく、人間の本性に根ざした音楽としてプッチーニが表現された。

こうした制作者側の要求を、舞台上で実現できる若い歌手たちの能力のアップも近年は目立っており、地域オペラの役割りは増大している。

ザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団の好演にも、ふれておきたい。

（10月2日・川西市みつなかホール）

〈山下部吉彦〉